

こうすればうまくいく!

# 学級経営の アドバイス



子どもたちが充実した学校生活を送るための様々な工夫は、学級経営がうまくいってこそ、初めて生きてくるものです。

しかし一方、「子どもを理解しようと思っても、どうもうまくいかない」「学級の雰囲気を良くしたいのに、なかなか思うようにならない」と感じる先生方も増えてきているようです。

今回は、学校教育の根幹をなす「学級経営」のポイントについて早稲田大学大学院教授の河村茂雄先生にお話をうかがいました。

取材・文 | 甲斐ゆかり(サードアイ) イラスト | 松井晴美

## 日本の「学級集団」の特徴

日本の学校教育において、「学級集団」のありかたは、他の国には見られない独特な面を持っています。それは、集団の密着度が非常に高いことです。

子どもたちは、固定されたメンバーによって、少なくとも一年間は生活と授業を共にします。また教師は、学習指導と生活指導の双方を統合して行います。

このような状態のもとで、学級内の人間関係は大変濃いものとなります。そのため、子ども同士の関係性の良し悪しが、学級の雰囲気や学習の深まり具合に大きな影響を及ぼしてきます。

しかしながら、大学ではこれまで、学級経営についてきちんとした教育が行われてきませんでした。学級経営とは、系統立てて理論を学ぶというよりも、実習先で体験して会得するもの、という感覚が強かったからです。

学級集団を良好に保つには、①学級の中で子どもたちが集団生活を送る「ルール」を共有していること、②感情交流のある「リレーション(人間関係)」をきちんと構築していること、の二つがとて重要で重要です。しかし、これらを教師が客観的に測るのは、現実にはそう簡単ではないと言えるでしょう。

また、今の子どもの様子は、以前とは大きく変わっています。感情の表し方が昔とは変わり、教師が子どもを理解する

のが難しくなってきたのです。その結果、教師が学級集団の状況が読めなくなり、学級崩壊に至るケースも目立ってきました。

学級崩壊は、教師にとって、自分の「教師」としてのアイデンティティを大きく揺さぶられる、つらい体験です。私は、そんな教師を一人でもなくしたいと思っています。

## 「管理型」か「親和型」か、 自分の指導の傾向を知り、 学年連携を

学級経営を考えるにあたっては、子どもたちの状態を理解するのももちろんですが、自分の学級経営のやり方の特徴や弱点に気付くことも大変重要です。

代表的なリーダーシップ理論のPM理論を用いるなら、教師のリーダーシップの発揮の仕方には「管理型(Pタイプ)」と「親和型(Mタイプ)」の二つの面があると言えます(P2参照)。

「管理型」は、昔のベテラン先生によく見られたパターンです。厳しく指導するので、学級は一見まとまって見えます。しかし実際には、できる子とそうでない子の学級に対する満足度に大きな差があり、人間関係にもばらつきが見られます。従来は主流とされてきたやり方ですが、子どもたちが協動的に学びあえるような関係があまりなく、問題行動が生まれやすい状態と言えます。



PROFILE

河村 茂雄 先生 Shigeo Kawamura

早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授。公立学校教諭・教育相談員を経験し、岩手大学助教授、都留文科大学大学院教授を経て現職。日本教育カウンセリング学会常任理事。日本カウンセリング学会常任理事。日本教育心理学会理事。論理療法、構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキルトレーニング、教師のリーダーシップと学級経営について研究を続ける。



## PM理論でみる教師の指導タイプ

PM理論とは、リーダーシップは「P機能（Performance function：目標達成機能）」と「M機能（Maintenance function：集団維持機能）」の2つの要素で構成されているという理論です。この理論にそって教師のリーダーシップを見た場合、「指導面が強いPタイプ」と「援助面が強いMタイプ」に大きく分けてとらえられます。スムーズな学級経営のためには、自分の指導の癖に気づき、修正していくことが大切になります。

### 管理型 (Pタイプ)

規律や集団活動での協調性を重視し、意欲的に物事を進め、指導性を強く発揮する。努力が足りないと感じられる子やみんなと同じ行動が苦手な子には、「厳しい」「こわい」と受け取られる面もある。

#### 注意したいポイント

- 子どもの精神面への配慮や、関わりづくりを援助する時間を増やす
- 特定のリーダーや目立つ子にだけ接するなど、子ども間に温度差をつけない
- 「指示を聞かない→罰する」という懲罰意識ではなく、子どもが「自分たちのために指導してくれている」と思えるような指導をする

### 親和型 (Mタイプ)

子どもたち一人ひとりの心情面への対応を重んじ、穏やかに物事を処理し、援助性を強く発揮する。自己主張が強く自立的な子には、「何でも言いやすい」「少し物足りない」と感じられる可能性もある。

#### 注意したいポイント

- 目標の達成や課題の遂行について指導する時間を増やす
- 「今日だけは特別に免除する」など、例外をつくらない
- 情緒的な関わりに偏らず、具体的な情報や目標設定のある援助を増やす

一方、今の若い先生は「親和型」が大部分です。友達のように一対一で子どもに向かい合うため、最初のうちこそ盛り上がりませんが、集団の「ルール」の理解のさせ方がわからず、少しのきっかけですぐに荒れてしまう傾向があります。

今の小学校教師の年齢構成は、30〜40代の中堅層が少なく、20代と50代に偏っています。そのため、ともすると、親子ほど年の離れた教師が全く対照的な学級

経営をしている場合も少なくありません。このような状況に陥らないよう、学年の連携をうまくとってほしいと思います。

**今必要なのは  
学級ソーシャルスキル**

良い学級集団をつくるには、今の子どもに合った学級経営の方法論をきちんと身につけることと、集団の状況を的確に

読めることが必要です。

それに関連して、私は、子どもたちに「学級に必要とされるソーシャルスキル (CSS = Classroom Social Skills)」を身につけさせることも大切だと考えています。CSSとは、学級の状態が良い場合や子どもたちの学級生活の満足度が高い場合、その集団で子どもたちが使用しているソーシャルスキルのことです。

子どもは従来、それらのスキルを地域社会や家庭での家族との交流の中で身につけていました。しかし今では、社会構造の変容により、その機会が大きく失われています。結果、共同体の中で生きていくために最低限必要なスキルを身につけられず、仲間の輪に加われなかったり、自己中心性が強くて周りの迷惑に気付かなかつたりする子どもが増えてきています。

義務教育の期間を過ぎてしまえば、学び直すチャンスはほとんどありません。教師は、時折ゲーム性を交えるなどして、繰り返しそれらを教えていく必要があるでしょう。

教える中身は、たとえば「友達が話しているときはその話を最後まで聞く」「係や当番の仕事は最後までやり遂げる」など、いわば当たり前のものばかりです。しかし私は、そんな「当たり前」のことで、教師が系統立てて意図的に学習させていく時代が来たのだと感じています。

### 教師としての信頼感を自ら獲得していく時代になった

よく「先進事例を学ぶ」といって、フィンランドや秋田県など、他地域の例を参考にする方がいらつしやいます。しかし、たとえ非常に良い実践事例だとしても、自分の住む地域と、生活文化や環境、地域性などがあまりにも違う場合、同じやり方が通用するとは限らないので注意が必要です。

それよりも、自分の住む場所と似たような環境や行動様式、生活様式、地域性をもった地域に注目してみましょう。たとえば東京に住んでいるなら、東京で結果を出している先生のやり方を参考にすることが、より効果的です。そのようにして、学級経営のモデルをまねていくこと

で、公教育として最低限保障できる教育水準がそろっていけば、学級崩壊も防ぐことができ、学校への信頼も高まると私は考えています。

かつてと違い、今の社会は、もはや「教師」という肩書きだけでは、一目置かれないう世の中になっていきます。ひと昔前までは、人々は「教師」という社会的な地位に対する信頼感を抱いていましたが、今やそれは消え、「個人」一人ひとりの力量に目が向けられるようになってきました。

これからは、「教師」という肩書きに頼らず、自らが信頼感を獲得していかなくてはならない時代になったのです。そのことをぜひ覚えていてほしいと思います。



### Questionnaire-Utilities

# Q-U

とは

河村先生は、学校集団の状況を視覚的に把握できる検査「Q-U」を開発しました。Q-Uの活用により、学校集団の状態を知り、より良い学級づくりに生かすことが可能となります。

河村先生が開発した学級集団アセスメント。①居心地の良いクラスにするためのアンケート(学級満足度)と、②やる気のあるクラスをつくるためのアンケート(学校生活意欲)の二つの尺度と自由記述によって構成され、コンピュータにより採点処理をする。現在、全国で230万人の子どもたちが利用している。

調査の実施により、不登校になる可能性の高い子ども、いじめを受けている可能性の高い子ども、学校生活への意欲が低下している子どもなどを早期に発見できる。また、学級崩壊などの問題に対応するための客観的なデータを得ることができる。

ソーシャルスキル尺度が加わった「hyper-QU」では、子どもがどれくらいソーシャルスキルを身につけているかも把握できる。



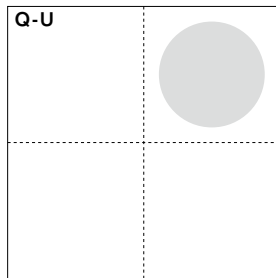
河村茂雄：著 図書文化社：発行  
小学1～3年／小学4～6年  
実施時間約20分  
定価：420円(税込)  
実施要領：300円(税込)

# タイプ別にみる 学級集団の状態と弱点

学級集団が成り立つには、対人関係や集団活動の基準となる「ルール」と、互いの感情交流がある「リレーション」の二つの要素が確立していることが必要です。Q-Uの2つのアンケートのうち、学級満足度尺度の子ども個人の結果を図に表すと、学級が現在どのような状態にあるかを見ることができます。

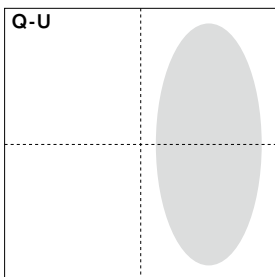
(出典：河村茂雄 著『学級づくりのためのQ-U入門』図書文化社)

## 満足型の集団



学級内にルールが存在し、子どもたちは主体的に生き生きと活動しています。子ども同士の関わり合いや発言も積極的になされており、もっとも学習が深まりやすい、理想的な状態です。

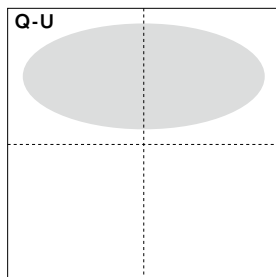
## かたさの見られる集団



一見静かで落ち着いた学級に見えますが、子どもたちの意欲の個人差が大きく、人間関係が希薄な状態です。教師に対してもまったくの受け身で授業に向き合っていません。充実感の高い子とそうでない子に二極化し、授業にプレーキがかかる傾向にあります。

- 対応方法 →
- ほとんどの子どもが取り組める課題からスタートする
  - すべての子が認められる場面を設定する
  - 机間指導では目立たない子に個別に声をかける

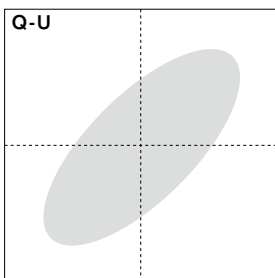
## ゆるみの見られる集団



一見自由にのびのびとした雰囲気ですが、学級のルールが低下しており、授業中の私語や子ども同士の小さな衝突が見られます。授業の盛り上がりは場当たり的で、学びが深まらない状態です。ゆるんだ状態が全体に広がると、一部から非・反社会的行動が起こる傾向にあります。

- 対応方法 →
- 授業に参加し活動するための「ルール」を定着させる
  - 短時間で指示が通るような工夫をする
  - 子どもたちと少し広めの心理的距離をとる

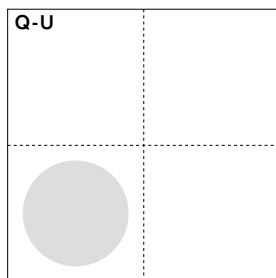
## 荒れ始めの集団



「かたさの見られる集団」「ゆるみの見られる集団」のそれぞれのマイナス面が肥大化して、問題行動が頻発してきます。「かたさの見られる集団」から変化した場合は、全体的にしらけた雰囲気でも重苦しく、発言する子は一部に限られています。「ゆるみの見られる集団」から変化した場合は、グループの対立や自己中心的な活動が見られ、全体での活動に時間がかかります。

- 対応方法 →
- やるべきことを明確にし最後までやり遂げさせる
  - 学習内容の保障のための個別学習の比率を高める
  - 逸脱行動をする子に巻き込まれない・深追いしない

## 崩壊した集団



子どもが学級に対して肯定的になれず、不安を軽減するために同調的に結束したり、他の子を攻撃したりしています。すでに教育的な環境ではなく、一人の教師の対応では難しい状態です。学校内の組織的な対応がなければ学習指導が成立しません。



「教師のためのソーシャル・スキル」  
河村茂雄：著 誠信書房：発行  
1,800円（税別）

自分のソーシャルスキルを磨くために



「いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル」(低・中・高学年)  
河村茂雄・品田笑子・藤村一夫：編著 図書文化社：発行  
各2,400円（税別）



子どものソーシャルスキルを育てる



「授業づくりのゼロ段階」  
河村茂雄：著 図書文化社：発行  
1,200円（税別）

Q・Uを授業づくりに役立てる

より良い学級経営のために